列王記第一 11章　　**ソロモンの罪**

アウトライン

0. イントロダクション

Ⅰ. ソロモンの罪　11章1～8節

Ⅱ. 神の怒り　11章9～13節

Ⅲ. 敵対者たち　11章14～25節

Ⅳ. ヤロブアムの召命　11章26～43節

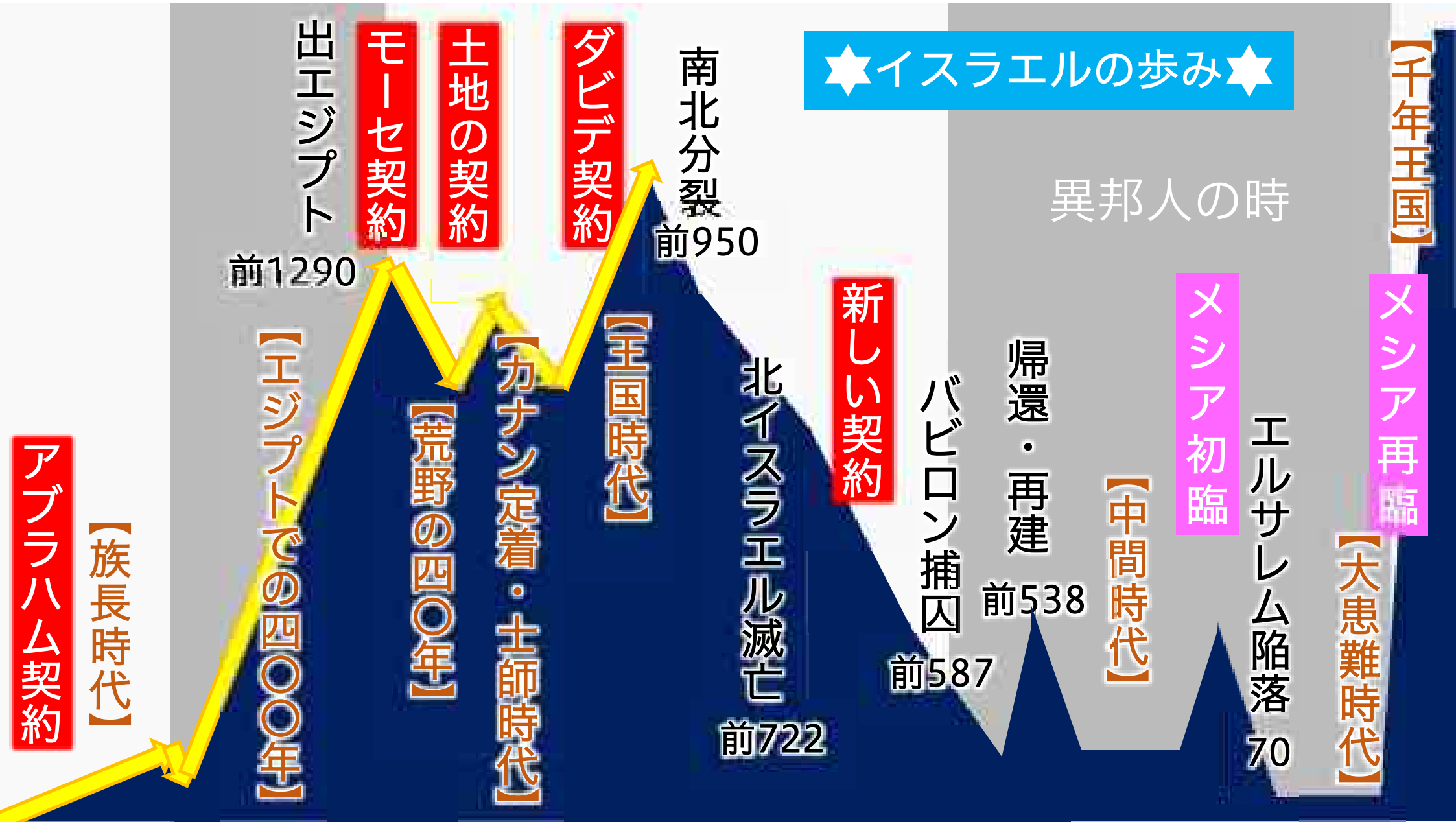
Ⅴ. まとめと適用

ソロモンに学ぶ、人の罪の本質

打ち砕かれ、恵みを得よう

旧市街の城壁

【無垢の時代】
天地創造
【良心の時代】
堕罪
~大洪水
【人類統治の時代】
バベルの塔事件
【約束の時代】
アブラハム
～ヤコブ
【律法の時代】
イスラエル
王国時代
メシア初臨
【恵みの時代】
聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨
【御国の時代】
千年王国
大審判
新天新地
①エデン契約
②アダム契約
③ノア契約
④アブラハム契約
⑤モーセ契約
⑥土地の契約
⑦ダビデ契約
⑧新しい契約
どの時代も
神の約束が礎にある
過　去
現　在
未　来


イスラエルの歩み
アブラハム契約
【族長時代】
【エジプトでの四〇〇年】
出エジプト
前1290
モーセ契約
土地の契約
【荒野の四〇年】
【カナン定着・士師時代】
ダビデ契約
【王国時代】
南北分裂
前950
北イスラエル滅亡
前722
新しい契約
バビロン捕囚
前587
帰還・再建
前538
【中間時代】
異邦人の時
メシア初臨
エルサレム陥落
70
【大患難時代】
メシア再臨
【千年王国】

列王記（第一～第二）

第一	1～11章	**ソロモン**王の治世 神殿建築	イスラエル（統一王国）
第一	12～16章	**王国の分裂**	
第一	17～22章	預言者**エリヤ**	
第二	1～2章		
第二	2～13章	預言者**エリシャ**	
第二	14～17章	**二つの王国**の歴史 北王国滅亡まで	
第二	18～25章	**ユダ王国**の歴史 滅亡まで	

ユダ（南王国）

レハブアム
アビヤム
アサ
ヨシャパテ
ヨラム
アハズヤ
アタルヤ
ヨアシュ
アマツヤ
ウジヤ
ヨタム
アハズ
ヒゼキヤ
マナセ
アモン
ヨシヤ
エホアハズ
エホヤキム
エホヤキン
ゼデキヤ

オバデヤ
ヨエル
イザヤ
ミカ
エレミヤ
エゼキエル

イスラエル（北王国）

ヤロブアム…ナダブ
バシャ…エラ
ジムリ
オムリ…オムリ…**アハブ**
…アハズヤ…ヨラム
エフー…エホアハズ
…ヨアシュ
…ヤロブアムⅡ
…ゼカリヤ
シャルム　メナヘム
ペカフヤ　ペカ
ホセア

エリヤ
エリシャ
アモス
ヨナ
ホセア

★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王

ソロモンの治世	**即位**	1章	アドニヤの謀反　ナタンの忠告 動いたダビデ　ソロモンの即位
	基盤固め	2章	ダビデの遺言・死 アドニヤの陰謀・死　ヨアブの死　シムイの処刑
	知恵	3章	ギブオンでのいけにえ　神の応答　ソロモンの願い ソロモンの裁き
	繁栄	4章	ソロモンの政権　行政区 王国の繁栄　ソロモンの知恵
	神殿建設	5～8章	職人、労働者　神殿の構造　祭具の構造 神殿の完成　神殿奉献
	名声	9～10章	ソロモンへの神の約束　建設事業　その他の業績 シェバの女王　栄華
	背教と死	11章	ソロモンの背教　神の裁き 外的の出現　内的の台頭　ソロモンの死

イスラエルの王の系譜　サウル～ダビデ～ソロモン

■最初の王**サウル**は、主に背き、王権を剥奪され、非業の死を遂げた。

■**サウル**亡き後、王となった**ダビデ**は、戦いを重ね、周辺国を平定。
エルサレムを都とし、**神殿**の設計図を記し、建材を準備した。

■年若き王**ソロモン**は、神に、民を治めるための知恵を願った。
御心に適った願いに、神は、富と誉れをも加えて与えられた。

■**ソロモン**は**神殿建設**を着工。7年を経て完成。主に**奉献**した。
イスラエルは繁栄を極め、諸国からの謁見も絶えなかった。
なかでも**シェバの女王**は、異邦人の信仰者として名を刻まれた。

Ⅰ．ソロモンの罪　　Ⅰ列王記11章1～8節

エルサレムの夕景

【ソロモンの妻たち】 Ⅰ列王記11:1～2

ソロモン王は、ファラオの娘のほかに多くの異国人の女、すなわちモアブ人の女、アンモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヒッタイト人の女を愛した。

この女たちは、【主】がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中に入ってはならない。彼らをあなたがたの中に入れてもいけない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせる」と言われた、その国々の者であった。しかし、ソロモンは彼女たちを愛して離れなかった。

【神の警告】出エジプト記34:15～16

あなたはその地の住民と契約を結ばないようにせよ。彼らは自分たちの神々と淫行をし、自分たちの神々にいけにえを献げ、あなたを招く。あなたは、そのいけにえを食べるようになる。

彼らの娘たちをあなたの息子たちの妻とするなら、その娘たちは自分たちの神々と淫行を行い、あなたの息子たちに自分たちの神々と淫行を行わせるようになる。

モーセの時代にすでに告げられていた警告。
律法を熟知していたソロモンが知らないはずがない!!

【ソロモンの心】 Ⅰ列王記11:3～4

彼には、七百人の王妃としての妻と、三百人の側女がいた。その妻たちが彼の心を転じた。

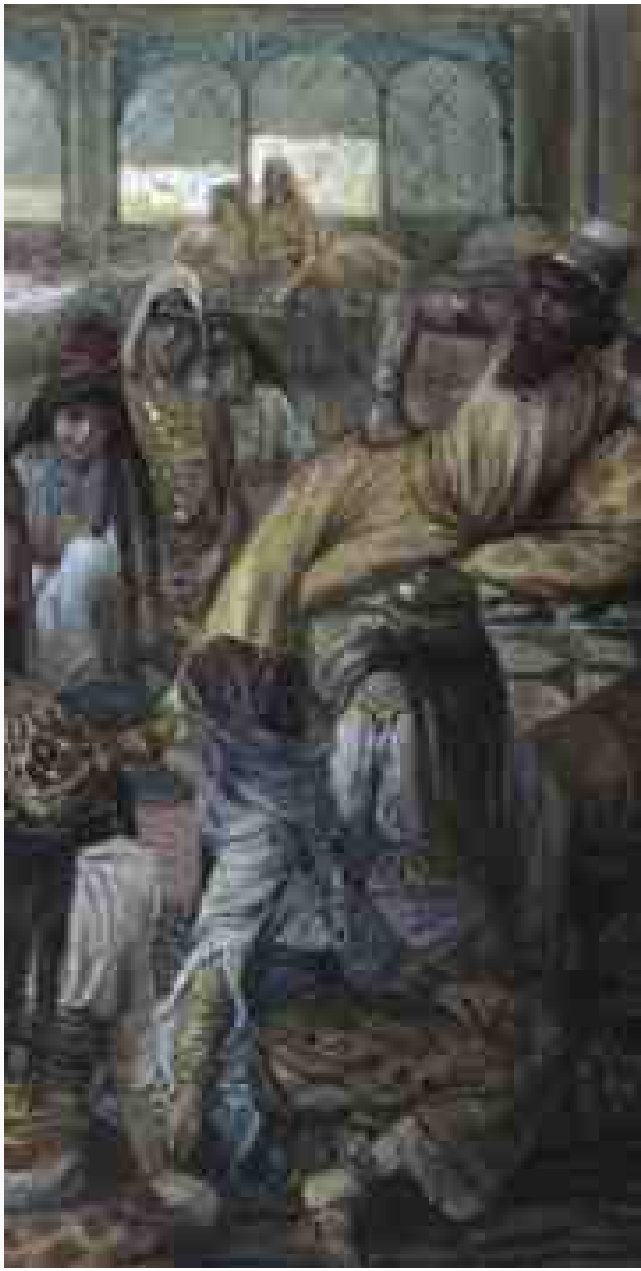
ソロモンが年をとった*とき、その妻たちが彼の心をほかの神々の方へ向けたので、彼の心は父ダビデの心と違って、彼の神、【主】と一つにはなっていなかった。

■**政略結婚**の結果、おびただしい数の妻と側女が。

➡神が禁じた異邦人との**契約**でもある。

＊老いが崩した、ソロモンの心の防壁。

➡ソロモンの心は主から離れてしまった。



【偶像礼拝】Ⅰ列王記11:5〜6

ソロモンは、シドン人の女神アシュタロテと、アンモン人の、あの忌むべき神ミルコムに従った。こうしてソロモンは、【主】の目に悪であることを行い、父ダビデのようには【主】に従い通さなかった。

アシュタロテ像

象牙に彫られた、エジプト文化に染まったのカナンの宮廷の様子

【偶像の祭壇ｓ】 Ｉ列王記11:7～8

当時ソロモンは、モアブの忌むべきケモシュのために、エルサレムの東にある山(オリーブ山)の上に高き所を築いた。アンモン人の、忌むべきモレクのためにも、そうした。

彼は異国人であるすべての妻のためにも同じようにしたので、彼女たちは自分の神々に香をたき、いけにえを献げた。

カナンの月神礼拝の祭壇

Ⅱ．神の怒り　　Ⅰ列王記11章9～13節

オリーブ山からユダの荒野に昇る朝日

【主の怒り】 Ⅰ列王記11:9～10

【主】はソロモンに怒りを発せられた。それは彼の心がイスラエルの神、【主】から離れたからである。主が二度も彼に現れ*、このことについて、ほかの神々に従っていってはならないと命じておられたのに、彼が【主】の命令を守らなかったのである。

＊二度も、主の直接の警告があったにも関わらず。

■忍耐深い神は、十分過ぎる猶予期間を与えられる。

民 14:18 『【主】は怒るのに遅く、恵み豊かであり、咎と背きを赦す。しかし、罰すべき者を必ず罰し、父の咎を子に報い、三代、四代に及ぼす』と。

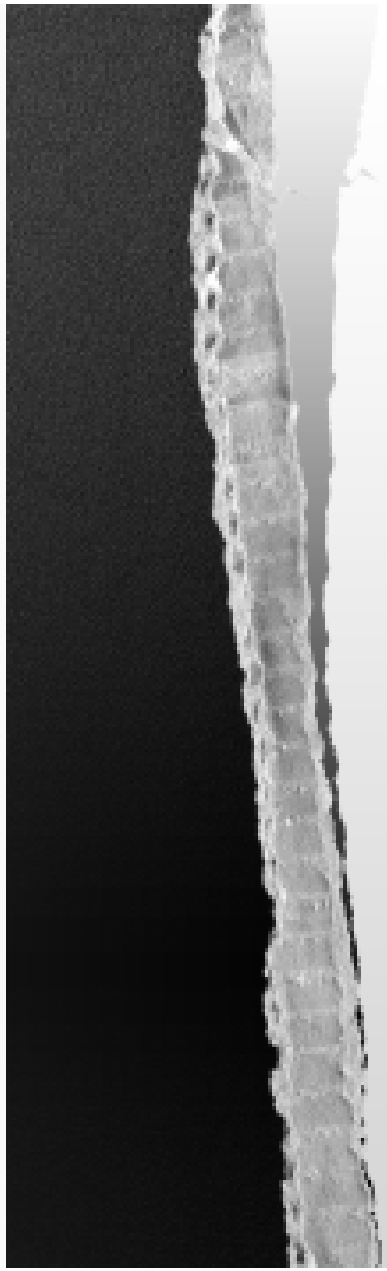
【ソロモンへの裁き】 Ⅰ列王記11:11

「そのため、【主】はソロモンに言われた。「あなたがこのようにふるまい、わたしが命じたわたしの**契約と掟**を守らなかった*ので、わたしは王国をあなたから引き裂いて、あなたの家来に与える*」

＊**律法**を守るなら、ソロモンには子孫に続く永遠の王座が約束されていた。

＊“地の面からイスラエルを断ち切り、宮を投げ捨てる(Ⅰ列9:7)” と 警告されていた。

➡なお示される猶予。神の憐れみと温情。



【主の憐れみ】 Ⅰ列王記11:12～13

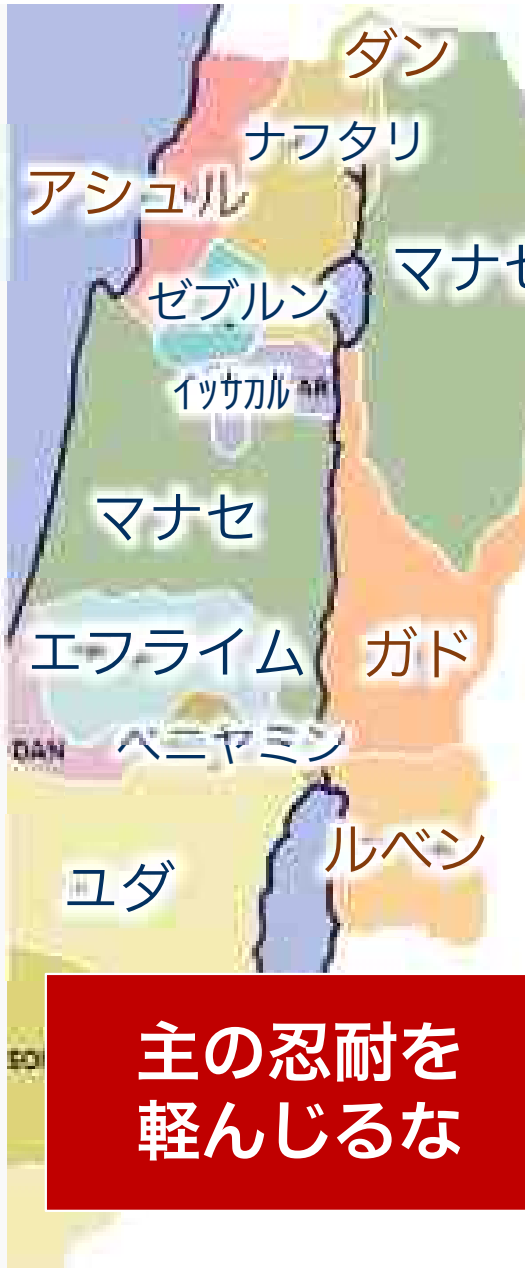
しかし、あなたの父ダビデに免じて、あなたが生きている間はそうしない*。あなたの子の手から、それを引き裂く。

ただし、王国のすべてを引き裂くのではなく、わたしのしもべダビデと、わたしが選んだエルサレムのために、一つの部族だけ* をあなたの子に与える。」

＊さらなる主の憐れみ。

＊王の系譜のユダ族にベニヤミン族が加えられた。

■もはやソロモンの応答は記されない。一方的宣告。



主の忍耐を軽んじるな

Ⅲ．敵対者たち　　Ⅰ列王記11章14～25節

【敵対者ハダド】 Ⅰ列王記11:14

こうして【主】は、ソロモンに敵対する者*として
エドム人ハダド*を起こされた。彼はエドムの王の子
孫であった。

＊“敵対者”＝サタン

＊“強大な”の意味。

➡イシュマエルの子孫にも同名の者が（Ⅰ歴1:30）
イシュマエル、エサウ（エドム）の両者の子孫？

➡エサウは、イシュマエルの娘を娶った。

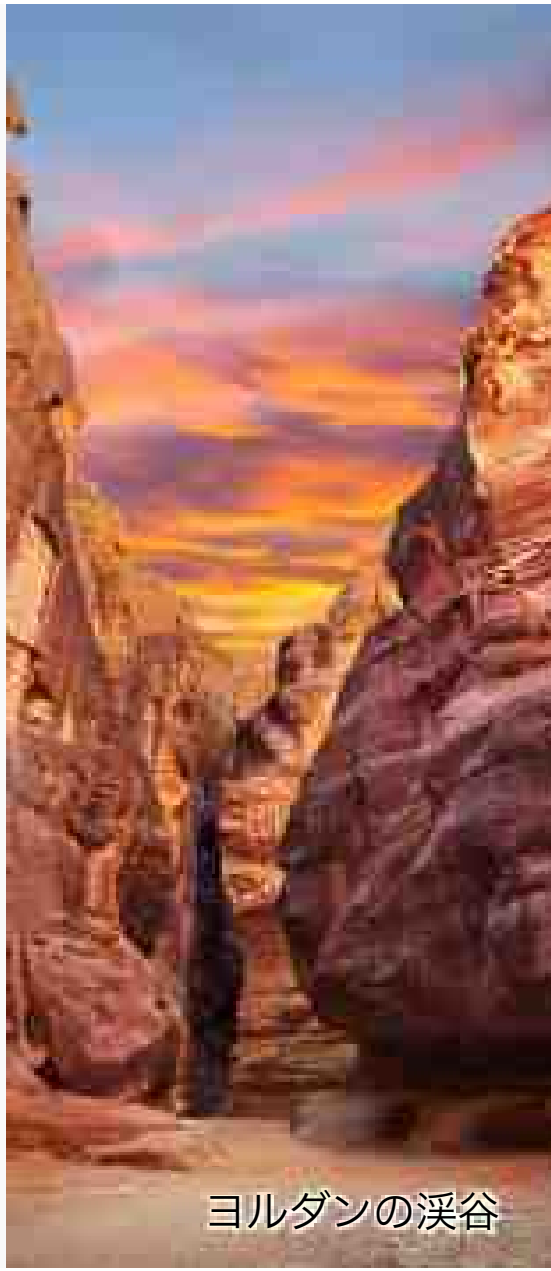
【将軍ヨアブの虐殺】 Ⅰ列王記11:15～16

ダビデがかつてエドムにいたころ、**軍の長ヨアブ**が戦死者を葬りに上って行き*、エドムの男子をみな打ち殺したことがあった。

ヨアブは全イスラエルとともに六か月の間そこにとどまり、エドムの男子をみな絶ち滅ぼしたのである。

＊自軍の犠牲者の仕返しをしたということか。
　ヨアブの残忍さが現れたエピソード。

■エサウの子孫エドムは、イスラエルの遠い親族。
　➡主の命じた聖絶の対象ではない。


ヨルダンの渓谷

【逃亡したハダド】 Ⅰ列王記11:17～18

しかしそのとき、**ハダド**は、彼の父のしもべである数人のエドム人と逃げてエジプトへ行った。当時、ハダドは少年であった。

彼らはミディアンを出発してパランまで行き、パランから何人かの従者を従えてエジプトへ、エジプトの王ファラオのところへ行った。するとファラオは彼に家を与え、食糧を支給し、さらに土地も与えた。

■ヨセフを連想させる背後にあるのは、主の働き。

➡神の民の敵対者も、全地全能の神の御手の内に。

【エジプトでのハダド】 Ⅰ列王記11:19～20

ハダドはファラオにことのほか気に入られ、ファラオは自分の妻の妹、王妃タフペネスの妹を彼に妻として与えた。タフペネスの妹は、彼に男の子ゲヌバテを産んだ。タフペネスはその子をファラオの宮殿で育てた。ゲヌバテ*は、ファラオの宮殿でファラオの子どもたちと一緒にいた。

＊“盗み、窃盗”　…盗賊になった？　ここだけ。

■ソロモンもエジプトから王妃を娶った。

ハダドに対抗する意図があった？

神の敵対者と同源の力を得ようとする愚かしさ。

【敵対者ハダドの帰還】 Ⅰ列王記11:21～22

ハダドは、ダビデが先祖とともに眠りについたこと、また軍の長ヨアブも死んだことを、エジプトで聞いた。そこでハダドがファラオに「私を国へ帰らせてください」と言うと、ファラオは彼に言った。「おまえは、私に何か不満があるのか。自分の国へ帰ることを求めるとは。」するとハダドは、「違います。ただ、とにかく私を帰らせてください」と答えたのである。

■ソロモンの治世の、敵対者となったハダド。

➡ソロモンが犯す罪を見越していた主の御業。

【アラムの敵対者レゾン】 Ⅰ列王記11:23～25

神はまた、ソロモンに敵対する者として、エリヤ*ダの子レゾン*を起こされた。彼は、自分の主人、ツォバの王ハダドエゼルのもとから逃亡した者であった。

ダビデがハダドエゼルの兵士たちを殺害した後、レゾンは人々を自分のところに集め、略奪隊の隊長となった。彼らはダマスコに行ってそこに住み、ダマスコを支配した。

彼は、ソロモンが生きている間、ハダドのように**悪**を行ってイスラエルに**敵対**し、イスラエルを**憎んだ**。こうして彼はアラムを支配した。

＊“神の知恵の王子”　➡名前もソロモンに対抗!!

Ⅳ．ヤロブアムの召命　　Ⅰ列王記11章26～43節

【ヤロブアム】 I 列王記11:26

ツェレダ出身のエフライム人*、ネバテの子ヤロブアム*はソロモンの家来であった。彼の母の名はツェルア*といい、やもめであった。ところが彼も王に反逆した。

＊ユダ族と拮抗するイスラエルの最大部族。

＊“神の民は戦う”

＊“満たされた乳房”だけど、やもめという不幸。

■苦労人であり有能な家来だったヤロブアム。

【手腕家ヤロブアム】 I 列王記11:27～28

彼が王に反逆するようになった事情はこうである。ソロモンはミロを建て、彼の父ダビデの町の破れ口*をふさいでいた。

ヤロブアムは手腕家であった。ソロモンはこの若者の働きぶりを見て、ヨセフの家のすべての役務*を管理させた。

＊エルサレムに防衛上の欠陥があった。

＊マナセ族、エフライム族からの役務者の管理。

➡主な仕事はクレーム処理？　難しい立場。

【預言者アヒヤ】 Ⅰ列王記11:29

そのころ、ヤロブアムがエルサレムから出て来ると、シロ人で預言者であるアヒヤが道で彼に会った。アヒヤ*は新しい外套*を着ていた。彼ら二人だけが野にいた。

＊“ヤハウェの兄弟”…偉大な信仰者だったのだろう。

＊野宿の際には、毛布代わりにもなった毛織り物。

貧者には着古した一着しかない命に関わる必需品。

➡新しい外套は、大変貴重で高価なもの。

【引き裂かれた外套】 Ⅰ列王記11:30～31

アヒヤは着ていた新しい外套をつかみ、それを十二切れに引き裂き*、ヤロブアムに言った。「十切れを取りなさい。イスラエルの神、【主】はこう言われる。『見よ。わたしはソロモンの手から王国を引き裂き、十部族をあなたに与える。

＊高価な晴れ着を引き裂く、ありえない行為。

➡行為に込められた神の強烈なメッセージ。

■栄華を誇るソロモンの王国は引き裂かれ、12分の10部族は、ヤロブアムに与えられる。

【一つだけ残されるユダの民】 Ⅰ列王記11:32～33

ただし、ソロモンには一つの部族だけ残る。それは、わたしのしもべダビデと、わたしがイスラエルの全部族の中から選んだ都、エルサレムに免じて*のことである。

というのは、人々がわたしを捨て*、シドン人の女神アシュタロテや、モアブの神ケモシュや、アンモン人の神ミルコムを拝み、父ダビデのようには、わたしの目にかなうことを行わず、わたしの掟と定めを守らず、わたしの道に歩まなかったからである。

＊ダビデ契約のゆえ、王の一族ユダは残される。

＊王の罪が、イスラエルの民全体に及ぼした悪影響。

【神の約束のゆえに】 Ⅰ列王記11:34～36

しかし、わたしはソロモンの手から王国のすべてを取り上げることはしない。わたしが選び、わたしの命令と掟を守った、わたしのしもべダビデに免じて、ソロモンが生きている間は、彼を君主としておく。

わたしは彼の子の手から王位を取り上げ、十部族をあなたに与える。

彼の子には一つの部族を与える。それは、わたしの名を置くために選んだ都エルサレムで、わたしのしもべダビデが、わたしの前にいつも一つのともしびを保つためである。

ダビデ契約ゆえのソロモンへの憐れみ

【ヤロブアムへの召命】 Ⅰ列王記11:37～38

わたしがあなたを召したなら、あなたは自分の望むとおりに王となり、イスラエルを治める**王**とならなければならない。

もし、わたしが命じるすべてのことにあなたが聞き従い、わたしの道に歩み、わたしのしもべダビデが行ったように、わたしの掟と命令を守って、わたしの目にかなうことを行うなら、わたしはあなたとともにいて、わたしがダビデのために建てたように、確かな家をあなたのために建て、イスラエルをあなたに与える。

歴代の王と同じ条件

明確に王として神に召命されたヤロブアム

【ヤロブアムの逃亡】 Ⅰ列王記11:39～40

「このために、わたしはダビデの子孫を苦しめる。しかし、それを永久に続けはしない*。』」

ソロモンはヤロブアムを殺そうとした*が、ヤロブアムは立ち去ってエジプトに逃れ、エジプトの王シシャク*のもとに行き、ソロモンが死ぬまでエジプトにいた。

＊ソロモンへの罰は、永遠の裁きではない。

＊アヒヤへの預言は、ソロモンの耳にも入った。

＊後にユダに侵入（Ⅰ列14:25～26）

■ヤロブアムもまた、エジプトに逃げ延びた。

【ソロモンの死】 Ⅰ列王記11:41～43

ソロモンについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、および彼の知恵、それは『ソロモンの事績の書*』に確かに記されている。

ソロモンがエルサレムで全イスラエルの王であった期間は、四十年*であった。

ソロモンは先祖とともに眠りにつき、父ダビデの町に葬られた。彼の子レハブアム*が代わって王となった。

＊現存しない書　＊ダビデ同様。苦難を示す。

＊“大きくされた、肥大した”

Ⅴ．まとめと適用

ソロモンの罪に学ぶ人の本質

打ち砕かれて、恵みを得よう

【ソロモンの罪を考える】

■ソロモンは**律法を熟知していた**にも関わらず、禁を犯した。
異国人の多くの妻を娶り、軍事力を増強し、過剰な富を貯えた。

■地上で**最高の知恵を与えられた**。神から直接、**二度も警告された**。
にも関わらず、罪を犯し続け、神の裁きを招いた。

■**知っていた。理解していた。分かっていた。**
にも関わらず、というところに、ソロモンの罪の重さがある。

神との約束が先にあり、分かって犯すのが罪の本質と覚えよう

【人はなぜ、分かっていて、なお罪にいたるのか？】

■人は、禁断の“善悪を知る木の実”を口にした。
善悪は**分かっているが、行えない**。この乖離こそ、人の罪の本質。

■**最高の知恵を得ながら、最悪の罪に**陥ったソロモン。
➡ソロモンの姿こそ、すべての人の偽らざる現実。

■知者、賢者と呼ばれる者も、すべての人間には、**深く暗い闇**がある。
例）　女遊びが激しかった、渋沢栄一、伊藤博文。

なぜ？　それが人間、それが私。聖書は現実を突きつける。

【なぜ？　ではなく、では？　と自問しよう】

■「なぜソロモンが」と他人事のように考える、私の罪はもっと重い。

■ソロモンですら、こんな罪に陥るなら、ましてや自分は？

■ささいなことだと、見逃している罪はないだろうか？
主の御心に適わないことを、ずるずる続けてはいないだろうか？

■悔い改めなく、性懲りもなく、その罪を続けていくならば？
神は、着実に、蒔いた種の刈り取りをさせられるだろう。

【自分の罪の現実に直面して、打ち砕かれよう】

■目を背け続けてきた**罪**を、目の前に突きつけられる瞬間がある。
それは、あなたの信仰が成長してきた、一つの確かな証でもある。

■まともに向き合えば、己に絶望するしかない。それが**罪**の本質だ。
人が、自分の**闇**に向き合うことを避けるのは、当然の本性と言える。

■真実に、自分の**闇**に直面できるのは、主に信頼する者だけだ。
永遠の救いの約束だけが、**罪**に向き合う土台となるから。

赦された恵みの内に、安心して自分自身に絶望しよう。

【伝道者の書に、ソロモンの人生の結論を学ぼう】

■栄華を極めたソロモン王の諦観が皮肉をも散りばめて記された書。

➡最高の知恵を得たゆえに、誰よりも深く、世に絶望するに至った。

■世に生きる限りにおいて待ち受けるのは、絶望と滅びしかない。

■知恵が促すのは、

たった一つの結論にたどり着くこと。ただ、それだけ。

知恵者ソロモンが絶望の果てにたどり着いた人生の結論とは？

■ 伝道者の書12章1～3節 ■

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。
わざわいの日が来ないうちに、
また「何の喜びもない」と言う年月が近づく前に。
太陽と光、月と星が暗くなる前に、
また雨の後に雨雲が戻って来る前に。
その日、家を守る者たちは震え、力のある男たちは身をかがめ、
粉をひく女たちは少なくなって仕事をやめ、
窓から眺めている女たちの目は暗くなる。

■ 伝道者の書12章13～14節 ■

結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。
神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。
神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、
すべてのわざをさばかれるからである。

【伝道者の書の結末】

■ソロモンは、**「わざわいの日」「その日」**ついて記す。

■一人の人間、一つの国、民族のとどまらない、わざわいの日とは、**来るべき、神の裁きの時**に他ならない。

■この恵みの時代の終わり、**神の裁きの大患難時代**の最後、メシアは再臨され、地上の悪を一掃され、不信仰者を裁かれる。

■すべてのことは、贖い主、救い主であり、**裁き主**であるメシア、主イエス・キリストの御手の内に握られている。

【伝道者の書の唯一の結論】

「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである」

■モーセに、ダビデに、ソロモンに、主が繰り返し命じられてきた、その本質は、今の時代も変わらない。

■再臨の主イエスを恐れよう。初臨の主イエスの命令を守ろう。ただ一つの救いの福音に立ち、立ち続けていこう。

「主イエス・キリストは、私の罪のために十字架にかけられ、死んで葬られ、死を打ち破って復活された。今も生きておられる」

赦された者は、罪を思い知らされることすら恵みと味わい知れる

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、
①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、
②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、
③三日目に復活(ふっかつ)したこと、を信じます。
ソロモンですら、大きな罪におちいりました。
ましてや、わたしなど、どれほど、もろいものでしょうか。
ただ、主の一方的(いっぽうてき)な めぐみによって、
あがなわれた わたしです。
主の前に打(う)ちくだかれて、ただひたすらに、
救いのよろこびを あじわいつつ、歩む者としてください。
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。　アーメン」